

13 ブルーベリー

地域慣行基準

【化学肥料】

区 分	窒素成分量 【kg/10a】	備 考
県下全域	7	

(1) 特徴及び吸収特性

ブルーベリー栽培が成功するか否かは、土壌の選択とその管理方法によって決まる。

栽培に適する土壌は、**火山灰土壌や砂質の土壌**で、乾燥防止のために**有機物マルチ**が必要である。マルチ資材としては、おがくず、チップかす、もみ殻等を用い、10～15cmの厚さに、樹冠下1m程度マルチする。

またブルーベリーの**好適 pH は 4.3～4.8** であるため、土壌が酸性でない場合は pH4.0 目標に酸度矯正を行う。

(2) 標準的な施肥法

定植後**活着するまで施肥を行わず**、1年目は**窒素成分で1株当たり6～8g**程度を**2～3回**に分けて施す。速効性肥料を用いると根が濃度障害を生じやすいため、**若木時は緩効性肥料**を用いると安全である。

定植後2～3年は、年々施肥量を増やし、葉の色を参考にして、何回かに分けて施す。7～8年生以降の**成木では、窒素で10a当たり7kg**程度とする。

成木では、休眠期（11月～3月）に基肥として施用することを基本とし、急激な溶解を避けるようにする。

米国では窒素を単肥で施す場合、土壌の pH (H₂O) によって種類を使い分け、pH5.0以上の土壌では硫安、pH5.0以下では尿素を用いている。カルシウムは pH が 4.0 以下の強酸性土壌以外は用いていない。